

3. 流域の社会状況

3.1 土地利用

3.1.1 土地利用の概況

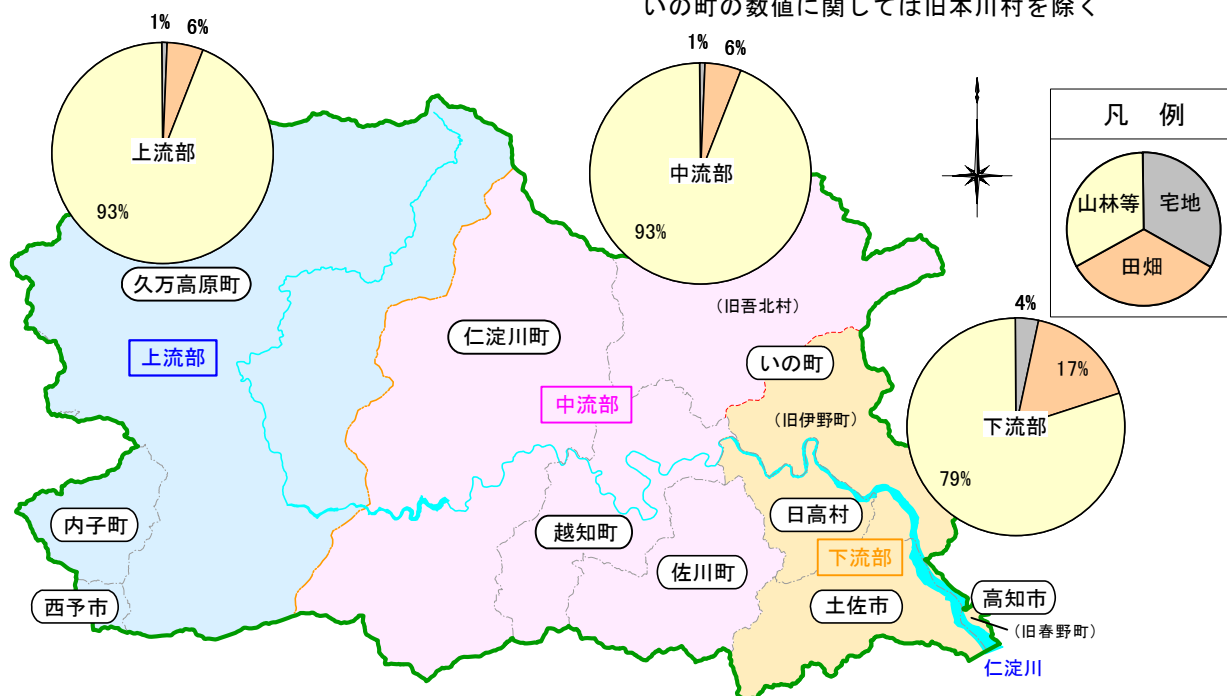
仁淀川流域内の土地利用は、山地がほとんど占めており約95%、その他水田や畑地等の割合は約4%、宅地等が約1%となっている。

また、流域に関連する自治体別の土地利用割合(下図表参照)からみても、ほとんどが山林等で構成されており、宅地や田畑は下流でわずかに見られるだけである。

表 3-1 自治体別地目土地面積 (km²)

	田	畑	宅地	山林	池沼	原野
久万高原町	11.84	11.19	3.49	542.44	0.16	3.2
西予市(旧野村町)	9.71	12.66	2.8	158.48	0.01	3.94
内子町(旧小田町)	1.93	5.26	0.86	131.68	0.02	0.09
仁淀川町	0.991	12.137	1.149	318.608	0	0.075
越知町	2.206	4.345	1.012	103.476	0	0.541
佐川町	9.508	3.526	2.281	76.978	0.001	0.48
いの町	5.883	8.256	3.248	243.039	0.001	1.489
日高村	3.011	2.32	0.941	37.692	0	0.82
土佐市	12.179	7.682	4.024	67.537	0.02	0.148
高知市(旧春野町)	10.456	2.689	2.592	28.748	0.001	0.454
合 計	67.714	70.065	22.397	1708.678	0.213	11.237

※仁淀川流域に含まれる自治体別土地利用状況(流域外含む)
いの町の数値に関しては旧日本川村を除く



出典：平成17年高知県統計書、平成17年愛媛県統計年鑑
※仁淀川流域に含まれる自治体別土地利用状況(流域外含む)

図 3-1 仁淀川流域の土地利用状況

3.1.2 地目別土地利用の推移

(1) 宅地面積

流域関係市町村の宅地面積は年々増加しており、40年間で約2倍に増加している。

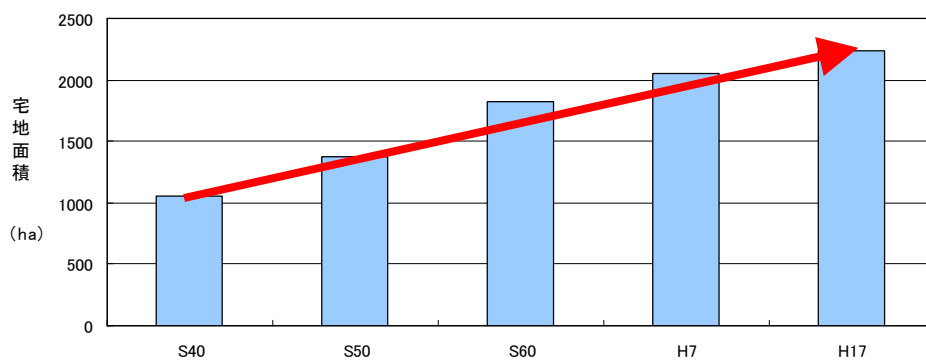


図 3-2 宅地面積の推移

(2) 水田面積

流域関係市町村の水田面積は緩やかな減少傾向にあり、40年間で約8割に減少している。

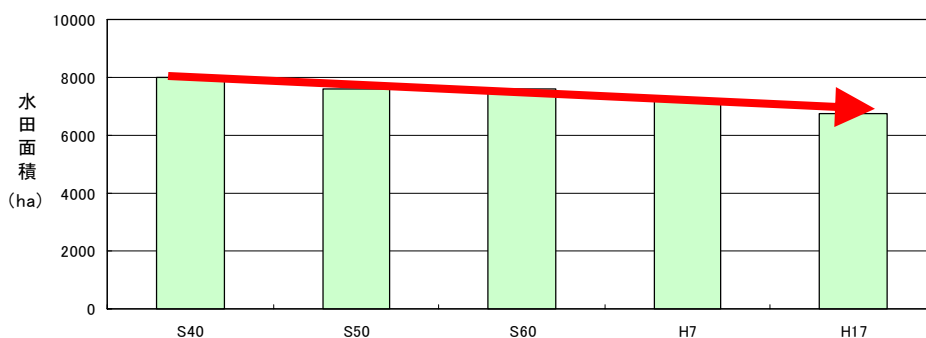


図 3-3 水田面積の推移

(3) 畑地面積

流域関係市町村の畑地面積は、昭和50年に大きく減少しており、40年間で約半分になっている。

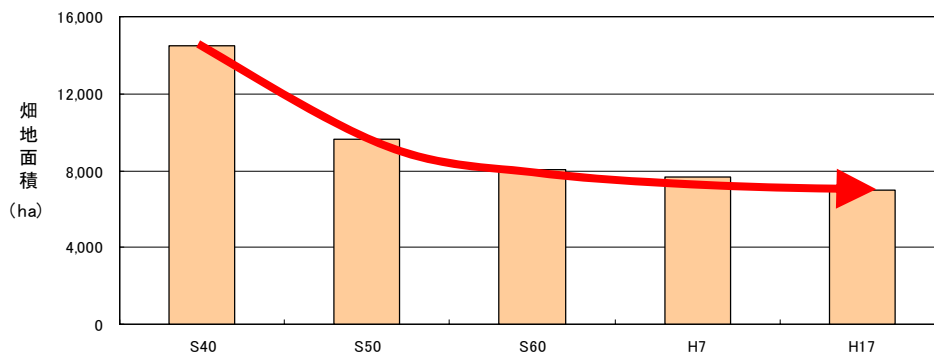


図 3-4 畑地面積の推移

出典：高知県統計書、愛媛県統計年鑑
※仁淀川流域に含まれる自治体別土地利用推移(流域外含む)

3.2 人口

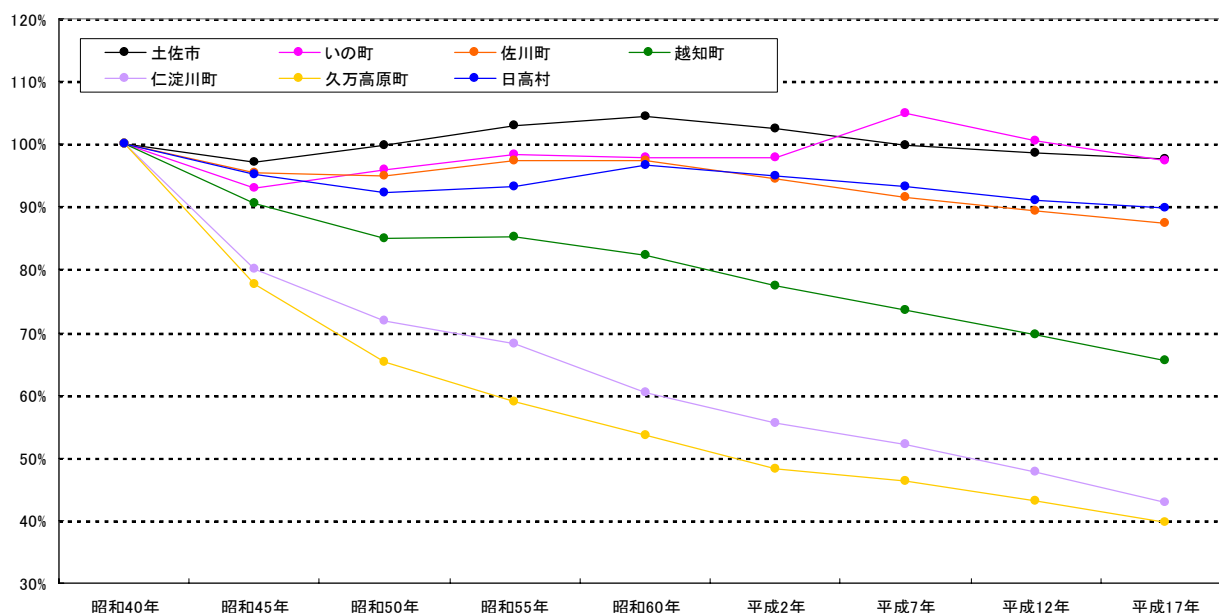
仁淀川流域にふくまれる市町村は、3市6町1村であり、平成17年における流域内人口は約10.5万人（西予市、内子町、高知市は除く）である。

流域全体では人口は減少傾向にあり、上中流部の山間部では過疎化が進行し、人口は減少の一途をたどっている。下流部の人口は最近では横ばい状態にある。

表 3-2 沿川自治体別人口の推移

区分	市町村名	人口（人）								
		昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
市	土佐市	30,772	29,905	30,679	31,677	32,147	31,564	30,723	30,338	30,013
町	いの町	27,800	25,827	26,683	27,320	27,236	27,191	29,149	27,970	27,068
	佐川町	16,546	15,774	15,694	16,113	16,124	15,636	15,148	14,777	14,449
	越知町	10,624	9,611	9,032	9,052	8,754	8,234	7,803	7,411	6,952
	仁淀川町	17,131	13,736	12,327	11,672	10,333	9,518	8,919	8,189	7,346
	久万高原町	27,582	21,432	18,014	16,225	14,760	13,313	12,781	11,887	10,946
村	日高村	6,554	6,232	6,048	6,110	6,341	6,223	6,105	5,968	5,895

※いの町の数値に関しては旧本川村を除く



※昭和40年の人口を100%にした自治体別における人口の増減の割合

※流域にわずかしが含まれない西予市、内子町、高知市は除く

出典：国勢調査

図 3-5 仁淀川流域の人口推移

3.3 産業・経済

流域の産業構造は、平成 17 年の産業別就業者数の構成比でみると、上流域では農山村地域が主であることから、中下流域に比べ第 1 次産業の比率が高く、下流域では、土佐市を中心に第 3 次産業の比率が高くなっている。平成 17 年の産業別就業者数の構成比率を昭和 55 年と比べると、第 1 次、第 2 次産業が減少し、第 3 次産業が増加しているが、大きな変化は見られない。

上流部では、森林資源が豊富で林業が主産業となっており、その次に農業が多くなっている。農業は、久万高原町の山間部の中に開けた平野で、米・葉タバコ・シイタケなどの栽培や養蚕等が行われている。

中流部は、越知町、佐川町付近にわずかに平野が開けるほかは山地で構成される地域である。和紙の原料であるコウゾ、ミツマタ、用材としてスギ、ヒノキ等が中流部一帯の町村から産出されている。シイタケ・茶・シメジ・コンニャク等の栽培も行われ、狭い水田では米もつくられている。また、佐川町では^{とがの}斗賀野の^{おおひらやま}大平山・鳥の巣などで石灰石の採掘が行われている。

下流部では、土佐和紙の発祥地と言われるいの町が、明治・大正期に製紙の町として飛躍的に発展し、現在も土佐市とともに機械製紙工場、手すき製紙工場が操業されている。土佐の和紙製造の起こりは明らかでないが、江戸時代にはすでに広く行われており、藩の重要産物の一つとされていた。また、仁淀川流域では芋けんぴの生産が盛んであり、国内生産の約 50%を占め、日本一を誇っている。化学工業製品として、高知市で生産されている電解コンデンサ用セパレータは世界シェアの約 70%を占めており、世界一を誇っている。

高岡・弘岡平野では、^{かまた}鎌田用水、^{ごなん}吾南用水による米作りが行われてきたが、促成栽培やハウス農園の普及によりきゅうり・なす・ピーマン等の生産が盛んに行われ、京阪神、東京市場等に出荷されている。特に、流域内のぶんたんの生産量は、高知県の生産の約 64%を占める。

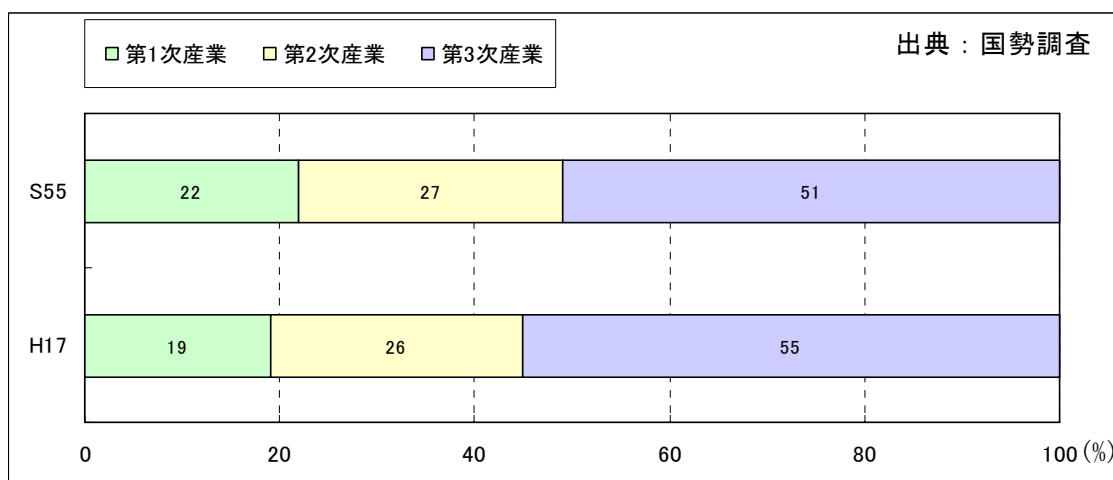


図 3-6 産業別就業者の構

3.4 交通

流域を通る主な幹線道路は、一般国道 33 号が流域の下流から上流に仁淀川に沿って走る主要な幹線道路となっている。また、56 号・194 号・380 号・439 号・440 号・494 号が流域内を縦横に走り、高知自動車道が流域の下流を通り、地域住民の日常生活や地域開発に大きな役割を果たしている。

また、鉄道としては、高松市と四万十町を結ぶ J R 土讃線^{どさん}が下流部を横切っている。



図 3-7 仁淀川流域の交通網